The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	係助詞「も」について
Author(s)	紙谷, 栄治
Citation	語文. 1988, 50, p. 32-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68778
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

係助詞「も」について

紙谷栄治

一

現代日本語において、「も」は一般に係助詞であるとされる。しかし、係助詞の機能がどのようなものであり、「も」が係助詞としてどのように位置付けられるかというと、なお考えるべき点があるようである。本稿では、「も」が表わす意味、機能について論じながら、係助詞の性質についてもかんがえてみたいとおもう。

「も」は通常「は」と対をなすものとして論じられることが多いが、佐治圭三氏1975は係助詞の機能として、①終止文節に活用語の特定の活用形を要求する機能、②言い切りの述語が来なければ治まらないような係り方をする機能、③素材を統括しつつそれを場面に向かわせるような「場面志向性」を同時にあらわす機能、④強調的指示（他のものとの相対的関係において一つのものを特に取り上げること）の四つを上げられた。そして、「は」は②〜④の機能をもつのに対して、「も」は③の機能を不十分にもつに過ぎないことに注目され、「も」を係助詞から除かれた。以上の①〜④のうち、①の機能は現代日本語にはみられないから、「は」と「も」に相当に大きな違いがあるとみられたわけである。

また係助詞「も」のあらわす意味についてみると、「も」は添加の意味を表わすことが多く、それが現代語では最も主要なものになっているが、なかにはそのような意味がはっきりしない用例もある。例えば、何に対して何が添加されているのかを明らかにできないばあいもあるが、そのようなばあいは含蓄をこめた表現とされることがある。その外にも「も」はさまざまな意味をあらわすとみられるが、なぜそのような意味でつかわれるのかということを明らかにすることも必要であるとおもう。このことは係助詞とはどのようなものであるかを考えるてだてともなるだろう。

また「も」は古くから頻繁に出てくる助詞でさまざまな用法があるが、それを歴史的にみたばあいには、現代語を考えるためのいろいろな手がかりが得られるようである。それらの用法のなかには、今日と同様のものが多い反面、今日ではもはや用いられないものや、例えば「もしも」「よもや」「さも（得意そうに）」などのように、かつての係助詞の用法が現代語の中で固定的にうかがわれることもある。これらのばあいもそのような用法が今日まで保たれている理

由があるはずであるから、それを明らかにすることができれば、係助詞の特質を知るうえで役立つはずである。本稿ではそれらの点について若干の検討を加えたいとおもう。

二

係助詞は、文中のいろいろな位置におかれるが、それらはおおよそつぎのようにわけられる。

① 「も」は格をあらわす助詞に代わったり、またそれらに下接して用いられる。

（主格に）

（1） 彼もおみやげをあげた。

（他の格に）

（2） 彼は彼女にもおみやげをあげた。

（述語の中で）

（3） 彼は彼女におみやげをあげもした（あげたりもした）。

（4） 彼はそれを書きもし、読みもした。

（5） それほど高くもなかった。

さらに、副詞などにも下接して、

（6） なおもかれらは努力を続けた。

のように、用いることができる。

② このように格などをあらわす語につくのは、主文のばあいにかぎらず、従属節中のばあいにもあてはまる。

（7） 彼も来たときに、みんなで一緒に相談しよう。

（8） 彼も来たので（から、し）、みんなで相談をはじめよう。

（9） 彼は彼女にもおみやげをあげたので、彼女はたいそうよろこんだ。

（10） 彼は彼女におみやげをあげたりもしたので、彼女はたいそうよろこんだ。

また、ある従属節はその従属節中に特定の係助詞をとることがある。「も」をとる従属節には、たとえばつぎのようなものがある。

（11） ……するのもそこそこに

……にもかかわらず

……にもせよ

……（する）までもなく

これらのばあいの「も」は、今日では慣用的に用いられたものであるが、逆接や譲歩をあらわす従属節中で用いられていることが注目される。

③ また次のようなばあいには、従属節の末尾に「も」がつかわれる。たとえば、

ながらも、つつも

ても

けれども

これらのうち、「ながら」「つつ」「て」のような接続助詞は、それ自体が順接、逆接の何れにも用いられるが、「も」は単独でも逆接の意味をあらわすものに付いて、逆接的な意味を明瞭にするためにつかわれているとみることができる。

このように、「も」は、格をはじめとして、文中のさまざまな位置におかれるわけである。しかも、それぞれのばあいにおいて共通な意味をあらわすとみられる。そこで、以上の点に留意してつぎに

「も」のあらわす意味についてみることにする。

三

「も」は、以上のように、主格および他の格をあらわす助詞に下接したり、述語の中に入ったり、従属節の末尾におかれたりする。さらに、従属節の中にも用いられる。そして、それぞれのばあいに以下に述べるような意味をあらわすことになる。以下、それらを「添加」「含蓄的な強調」「逆接」「譲歩」「可能性」に分けて説明を加えることにする。

（添加）

添加は「も」のあらわす意味の中で最も論理的な関係をあらわすものといえる。たとえば、

（12）　彼は今度転勤するらしいね。彼女もだよ。

（13）　その本も大いに役立った。

のように、すでに述べられたことがらや、その存在が暗に示されることがらに対して、同類と見られることがらを付け加えるものである。この意味は「も」のあらわす、最も基本的なものであり、以下のばあいにもこの意味が暗に含まれることになる。

（含蓄的な強調）

これは、先の添加の意味が、何に対して添加の意をあらわすのかが明白でなくなったばあいである。たとえば、

（14）　日もとっぷりと暮れた。

（15）　春もたけなわ、八重桜も満開になった。

（16）　足取りも軽く、一行は出発した。

のようなばあいであるが、これらは言外に文の内容を支持する事態が存在することを暗に示している。また、つぎのように、同一の語を重ねることがある。

（17）　彼も彼だ。もうすこし注意すればよかったのに。

（18）　完敗も完敗、いいところなく終わってしまった。

（19）　選りにも選って、こんな忙しい日にでかけなくてもいいのに。

（20）　書きも書いたり、できあがった作品がこんなにある。

また、副詞にもつぎのようにつく。

（21）　彼は幸運にも出場できることになった。

（22）　早くも彼がトップにたった。

例文（22）のばあい、「早く」だけでは不可である。そのほか、程度がある限度に達していることをあらわす。

（23）　そこに着くまでに、一時間も歩いた。

しかし、「も」は本来、他にも同類のものがあることを暗に示すものであるから、明白に限定する語がきたばあいには「も」は用いられない。たとえば、例文（23）もつぎのようなばあいには、「は」が用いられることになる。

（24）　そこに着くまでに、最低一時間は歩いた。

（逆接）

逆接というばあいは、従属節と主文との間の関係についていうのが普通である。実際「も」は、「ても」「ながらも」「つつも」「けれども」などのように、従属節の接続助詞に下接してあらわれることが多い。しかし「も」は、次のように文中の部分について、それが矛盾する関係にあることを表わすためにも用いられる。

まず、主格に用いられた例からみると、たとえば、

(25) いつも元気な彼もさすがに疲れていた。

(26) せっかくのご馳走もおいしくなかった。

(27) 彼は豊かな自然もうれしくなかった。

のようなばあいは、主格の名詞が、「いつも元気な彼であるにもかかわらず」「せっかくのご馳走であるにもかかわらず」「豊かな自然であるにもかかわらず」などのように「にもかかわらず」の意で用いられたものである。このような例文のばあいには、「も」が用いられるのが普通であって、そのかわりに「は」を用いることは無理なようである。同様にこのような「も」は主格以外の格をあらわす格助詞にも下接することができ、

(28) 一週間たつと、楽しい旅にも飽きてしまった。

(29) 彼は、こんな天気にもかさを持たずに出かけた。

のようになる。

また、

(30) 行くにも行けなかった。

(31) あまり意外だったので、泣くにも泣けなかった。

のようなばあいも、「も」が用いられる。これは、

(32) あまり意外だったので、泣くに泣けなかった。

のように、「も」がなくても可能であって、逆接を明示するためのものであろう。

また、「にもかかわらず」「さることながら」などで終わる従属節中では、格などをあらわすのに「も」が用いられる。たとえば、

(33) 悪天候にもかかわらず、／悪天候をものともせず、／彼らは出発した。

(34) 物価が高いの＊は／も／さることながら、環境もあまりよくない。

(35) あいさつもそこそこに、早速仕事の話を始めた。

一方、このような「も」は、接続助詞に下接して用いられることが多い。たとえば、

(36) そのことを／知りつつも、／知りながらも、／知っていても、／知らないふりをした。

このように、逆接をあらわす従属節の末尾に用いられるが、このばあいも、「つつ」「ながら」「て」のように、必ずしも逆接の意味をあらわさない接続助詞について、逆接の意味を明示させるものである。

以上のように用いられた「も」は、「も」によって取り立てられたものが、後続の述語に対して矛盾する関係にあることをあらわすものということができる。

(譲歩)

「も」はつぎのようなばあいには譲歩の意味をあらわすことができる。たとえば、

(37) 小さな／故障も／故障さえも／大事故につながる。

(38) どんな小さな故障にも対処できる。

(39) どんなに小さな／故障も／故障をも／見逃さない。

のような「も」は、「でも」「であっても」「だって」によって置き換えることが可能であり、譲歩の意味をあらわすものとみることができる。

このような「も」を、先の逆接の意味をあらわすばあいと比べると、

(40) ふだん興味を示さない彼も、そのときはたいへん喜んだ。

では、逆接の意味をあらわすとみられるが、それが

(41) ふだん興味を示さない人も、喜ぶでしょうか。

のように、「でも」に置き換えることができるばあいは、譲歩の意味をあらわすものとみることができる。

また、この「も」は、つぎのような譲歩や仮定をあらわす従属節のなかでもつかわれる。

(42) 構造が複雑であるにもせよ、故障が多すぎる。

(43) 特別な事情があるなら考慮もしようが、そうでない以上無理です。

(44) それほど{忙しくなければ / 忙しくもなければ}出席したほうがよい。

このような「も」が従属節の後ろにつくことは

(45) こんなに寒くても行くのですか。

のように例は多い。

さらに、「も」は疑問をあらわす語とともに用いられることがある。

(46) どれも僕のだ。

(47) どれも僕のではない。

(48) どれも良い。

(49) どれも良くない。

(50) いかなる人も理解できる。

(51) いかなる人も理解できない。

このような場合に、肯定文で用いられると全面肯定、否定文で用いられると全面否定をあらわすことになる。しかし、

(52) だれも理解できない。

(53) *だれも理解できる。

のようなばあいは常に否定形をとり、例文(53)を肯定文にするためには、

(54) だれでも理解できる。

のように、譲歩をあらわす「でも」の形をとるか、あるいは

(55) だれもが理解できる。

のように、格助詞をともなうことが必要である。一方、否定文のばあいは、

(56) だれでも理解できない。

(57) だれもが理解できない。

のいずれもが可能で全面否定をあらわす。また、「も」が数量や程度をあらわす語をともなうときは、

(58) 解けないところは、ひとつも(少しも)なかった。

のように、必ず否定文になるので、譲歩の意をあらわすときは、

(59) 解けないところがひとつでも(少しでも)あれば、もう一度調べてみなさい。

のように、「でも」が用いられる。これらの例にみられるように、現代語において譲歩をあらわすばあいは、「も」単独ではなく「で

も」によることが多くなっている。

（可能性）

「も」は譲歩の意味をあらわすとともに、譲歩は一種の仮定であるために、以下の例文においては、ある事態が当然予期されるばあい、またその可能性が高いとき、もしくはその実現が望まれるときに用いられる。たとえば、

（60）　またいつか良いこと｛＊は／も｝あるでしょう。

（61）　｛＊すぐには／すぐにも｝良くなりそうだ。

（62）　ほかの方法｛＊は／も｝ありそうなものだが、一番厄介な方法をとってしまった。

（63）　こと｛＊は／も｝あろうに、とんな大事なときに失敗してしまった。

（64）　よく気をつけないと大きなミスに｛＊は／も｝なりかねない。

のような「も」を用いた例がみられる。

また、そう考えることが理にかなっていると認められることを表わすばあいにも、たとえば、

（65）　彼がそう主張するの｛＊は／も｝道理（当然）、彼には豊富な経験がある。

のように用いられる。

また勧誘するばあいにも、

（66）　｛＊かんがえては／かんがえても｝ごらん。

のように用いられる。

さらに、慣用的に用いられる次のような表現もこのような用法によるものであろう。

ややもすれば

ともすれば

四

以上、現代語における「も」の用法をみてきたのであるが、これらの用法はすでに古くから存在してきたもののようである。それぞれにあたる用例は容易に見出す事ができると思われるが、先に「可能性」としてあげたものについて、時代的には連続しないのであるが、源氏物語の中から例をあげておくことにする（括弧内は源氏物語大成のページ数をあらわす）。

文末が「ばや」や未然形接続の「なむ」で終わる文中では、つぎのように「も」が用いられる。

（67）　いとあり難くものしたまふ深き御気色を見はべれば、身にはこよなくまさりて、長き御世にもあらなん、とぞ思ひはべる。（若菜上　1101）

（68）　近くて見ん人の聞きわき思ひ知るべからむに、語りもあはせばやと、（帚木　43）

このように、願望や他に対して願うばあいには「も」が用いられる

ことになる。

また、「つべし」「ぬべし」で終わる文のばあいも同様である。

(69)　(夕霧が恋死して)世のためしにもなりぬべかりつる身を、心もてこそかうまでも思しゆるさるめれ。(藤裏葉　1004)

(70)　「……。ただはかられたまへかし」となつかしげにのたまへば、女(夕顔)もいみじくなびきて、さもありぬべく思ひたり。(夕顔　115)

(71)　かごとも聞こえつべくなむ。(桐壺　15)

(72)　(薫は浮舟を匂宮に)思いも譲りつべく、退く心地したまへど、(浮舟　1910)

これらのばあいも、そのような事態が生じる可能性が高いことや当然予測されることをあらわしている。

また、「もや」「もぞ」「もこそ」なども多くみられるが、そのようなばあいも同様であって、望む望まないにもかかわらず、その事態が生じることが予測されることをあらわすものということができよう。

五

現代語の係助詞は文末のむすびに特定の活用形を要求しない。また、「しか」に見られるような否定を意味する述語がくるという制約はそれ以外の係助詞においてはみられない。その意味では現代語の係助詞は、格助詞や副助詞との形態論的な比較によって、最も明確にすることができるといえる。

しかし、「も」は第二章でもみたように、主格やその他の格をあらわす助詞の後(主格や目的格のばあいのように、格助詞に代わって用いられることもある)や、述語の中に入ったりすることがあり、また連用修飾語や従属節の末尾にくることがあるように、文中のさまざまな位置におかれる。そして後者のばあいには「けれども」「ても」「つつも」「ながらも」などのように接続助詞の一部として固定的に置かれることがある。

また以上にみられるようなことの多くは、「も」だけでなく、「こそ」においてもみられるわけである。たとえば

(73)　彼は／彼も／彼こそ

(74)　……ときには／ときにも／ときにこそ

(75)　……ては／ても／てこそ

のように「は」「も」「こそ」に共通する。他の接続助詞に下接するばあいには、そのようにいえないが、それはたとえば「ば」は、「は」や「も」とは共起しないが「こそ」となら可能であるというような意味的な理由にもとづく制約によるものであろう。

さらに、第四章にみられるような意味はすでに古くから存し、あるものは現在よりも明瞭に現われることもある。特に「可能性」としたものはそうである。さらにそれらは現在慣用的にもちいられる句においてしばしば見られることにも注目されるのである。このようなことを考えあわせると、「も」はそれを他と同類とみなしてそれに加えるのか、それが下接する語が以下の叙述と矛盾するものとみなすのか、それを譲歩としてあらわすのか、それが妥当性があったり可能性が大きいものとみなすのか、などをあらわすものといえよう。また、いわゆる逆接や譲歩のばあいは、それをあらわすために従属節を構成しなくても、「も」を用いることによって、文中の

各要素に対してただちにそのような意味をあらわすことも可能である。

このように係助詞は文中の各部分を以上にのべたようにとりたてるものということができるとおもう。

（文献）
尾上圭介一九八一年「「は」の係助詞性と表現的機能」（「国語と国文学」第五八巻五号）
工藤美沙子一九六四年「ハとモ」（『講座現代語』六）明治書院
佐治圭三一九七五年「現代語の助詞「も」――主題、叙述（部）、「は」に関連して――」（「女子大文学」第二六号）
高橋太郎一九七八年「「も」によるとりたて形の記述的研究」（国立国語研究所『研究報告集』一）
宮地敦子一九六七年「も」「は」（『古典語・現代語助詞助動詞詳説』）学燈社

――松蔭女子学院大学教授――